
果物語

夜鷺香琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

果物語

【Nコード】

N8240B

【作者名】

夜鷺香琉

【あらすじ】

蜜柑^{ミカン}はこの春、高校一年生。平和に暮らすと決めていた高校生活は、入学当日に壊される。それは『ナイフ』と呼ばれる生徒会の、ハチャメチャなメンバーとの出会いだった……。そして、彼等との出会いは、蜜柑の過去を甦らせていく……。

-そして幕が上がる-

時は夕闇。

街外れの小劇場。

壇上に一つの影が現れる。水を打ったようにその場が静まる。

「私は語りべ。物語を紡ぐもの。

今宵も皆様に極上の物語を捧げましょう……。」

ローブに体をすっぽり覆った女が呟く。

ほっそりと伸びた手には、大きな本が抱えられている。

漆黒のカバーのその本を軽がると開き、また呟く。

「おや？今日は学生のお客様が多いようだ。それなら、こんなお話はいかがかな……。？」

そして、彼女は本のページを白い指でなぞりながら、言葉を紡ぎ始めた。

それは、とある学校のお話・・・

第一幕：果物を求めて

校舎に続く並木道は桜が咲き誇り、初々しい少年少女達を祝福する。真新しい皺ひとつない卸したての制服。

白に近い淡い水色のブレザーと濃紺色のズボンとスカート。

不安と期待の交じる緊張した顔で、校門をくぐり抜けてく。

本日、お日柄宜しく、都立双樹学園高校の入学式である。

続々とやってくる新入生の姿を教室の一角の窓から見つめる影が二つ。

「どうだ？目欲しい奴はいたか？」

「うっせー、^{ザクロ}柶榴！いねーからこうしてウォッチャーしてんだろっ」

柶榴と呼ばれた少年は、目深に被っていた耳垂れ付きの帽子をずりあげた。

彼の左目には縦に長く伸びた傷痕が残り、閉じられている。

当然、光を宿すことはこの先、一生ないだろう。

残っている右目で隣にいる少年を睨み付ける。

睨まれた少年――^{セイ}聖は、うっ、とひるむ。

「朝っぱらから起こされたにもかかわらず来てやったってーのに、うっせーだあ？なあ、聖？」

「あ、ありがとうございます・・・」

「結構・・・つか、あいつらにも電話したんだろ？何で来ねーんだよ」

聖は自嘲気味に笑った。

「・・・低血圧って怖いよねー」

「あっそ」

大方、電話越しに怒鳴られたのだろう。

自分もそうすれば良かった。

わざわざ睡眠時間削って来たのが馬鹿馬鹿しくなってくる。

口に含んでいたガムを膨らませ、柘榴は興味なさげに外を見やる。その横で犬みたいに落ち着かない聖がやかましく喋っている。

「なー誰かいねーかなー。俺だけ後継ぎいないのヤバイってー」

「誰もお前に期待してないから、いいんじゃないの？」

「やだやだやだ！ぜってー見つけてやる！」

お菓子をねだる子供のように駄々をこねる聖に、溜息が出る。

お前は、一体いくつだ。

「紹介してやらんこともないけど、何か条件あるか？」

聖が瞳を輝かせて飛び付いてくる。

「名前！それは必須な！あとは、俺に従順なやつがいいなあ」

聖を尊敬するのはかなり無理があるだろう・・・言わないでおくけれど。

柘榴は帽子を取ってくるくる回した。

色素の抜けた髪は聖が出会ったときから変わらない。

柘榴はにっと笑う。

「一人いるぜ。長閑^{ノドカ}の親友だ」

長閑とは柘榴の彼女である。

「げっ、長閑の！？信用出来んのか？」

柘榴はわずかに眉を釣り上げたが、すぐに戻す。

「長閑が偉く可愛がって、俺にしか紹介しなかった娘だしなあ。聖には勿体ないな。じゃあ、この話は無かったことに・・・」

「しないで下さい！」

何をそんなに必死になっているのか分からないが、聖は懇願してくる。よほど焦っているらしい。

「そうだ！名前！名前は！？」

「慌ただしいな、少しは落ち着けよ。これだよ・・・ん」

柘榴はもう一度ガムを膨らまし、それを指差す。

それは、膨らんで薄くなった黄色い膜。

聖は意味が分からず首を傾げる。

見兼ねた柘榴が、ポケットから嚙んでいるガムと同じものを取出し、聖に渡してきた。

そこには一つの果物が描かれていた。

レモン、バナナ、グレープフルーツ・・・違う違う。

それは・・・

第二幕：フルーツ盛り合わせ

エンドウミカン
遠藤蜜柑は固まっていた。

そりゃあ、もう気分は南極だ。

蜜柑だけではない。

その場が凍り付いたように、誰も動かない。

新人生も、先生達も、保護者とか偉い人も。

おかしい・・・何かが、おかしい。

今は体育館で入学式がつつがなく進行してて、それでもって、自分は新人生代表とか務めた訳でもない。

どこにでもいる地味な娘だし・・・ああ、生い立ち考えると普通じゃないが、今はそんなことどうでもいい。

とにかく、マイク越しに自分の名が呼ばれた気がしたのだ。

今は生徒会長挨拶で、サレワセ佐枇杷聖という二年生の男子が壇上にいるのだ。

お堅いイメージのある生徒会長だが、彼を見るかぎりそんなもの全く無い。

なんていうか、元気とかやんちゃとかって感じ。

明るい茶髪と女っぽい、くりつとした目が犬みたいな印象を与える。

当然ながら蜜柑は彼を知らない。

したがって、彼が蜜柑を知っている確率は限りなくゼロに近いだろう。

暇なもんだったから少し舟をこいだ。

そうだ、寝呆けてたんだ、そうに決まってる。

しかし、蜜柑の願いにも似た考えは数秒もしないうちに砕かれた。

「休みじゃねーよなあ・・・？遠藤蜜柑、起立！！」

「は、はいっ」

叫んでからハツとなる。

ああ、条件反射で立ち上がってしまった。

その瞬間、一斉に周りからの視線が集まる。

蜜柑は顔面に血が上っていくのを感じた。

「あの馬鹿・・・」

生徒会は入学式に強制参加のため、柘榴は教師席横に控えていた。

こんな成りだが、一応、副会長だ。

ずり落ちた帽子を後ろに引つ張り戻す。

満面の笑みで壇上に迎う時点で、何かするとは思ってたが・・・いきなり名指しすんなよ。

『エンドウ・・・ミカン。遠藤蜜柑ね。覚えとこー』

先に教えるべきじゃなかったと今更、後悔する。

柘榴は重い溜息をついて、立ち上がる。

「しゃーねえなあ・・・行くか」

隣りの二人の人物に呼び掛ける。

その二人は、一様に苦笑いを浮かべ立ち上がったのだった。

蜜柑の体内の血は沸騰していた。
いつそのこと卒倒してしまいたい。

質の悪い目眩と頭痛がする。

小さなざわめきが蜜柑のことを言っているのが分かる。

逃げ出したいと本気で思った時、壇上に新たに三人の人物が上がってきた。

（ざっ・・・柘榴君！）

先頭にいたのは蜜柑の親友の彼氏である。

トレードマークの耳垂れ帽子に左目に残る傷。曰く、愛の証らしい。
続いて歩くのは、背の高い秀才っぽい美男子とモデルのようなお姉系の美少女だ。

柘榴は会長の横につくと手をスツと上げた。

バツチン！！！！

その場が静かすぎたのか、力が強すぎたのか、恐ろしい威力のデコ
ピンの打撃音が響いた。

的はもちろん生徒会長様。

柘榴は、悶え苦しみしゃがみ込んだ会長からマイクをぶんどった。

沸騰していた体が少しずつ冷めてきた。けれど、混乱しているのは
変わらない。

「えー、まずはこの馬鹿のせいで厳肅な式を台無しにしてしまったことをお詫びします」

柘榴は帽子を取って、紳士的なお辞儀をした。
場が再び静まる。

しかしながら、この騒動に教師陣は口出ししてこない。
最初は驚いていたものの、今はすっかり呆れ笑いを浮かべている。

どうやら、このような事態は初めてじゃないらしい。

柘榴が続ける。

「我々は、双樹学園生徒会執行部。通称『ナイフ』です」

その横で、おでこを押さえながら会長が立ち上がり、涙目の顔をしかめた。

反省の色は全く無い。

「この機会にナイフメンバーを紹介させてもらいたいと思います。
まず、会計・・・」

スッと一歩前に出たのは、例のお姉系の美少女。

トウノセツナ
「桃野刹那」

美少女・・・刹那が艶やかに微笑み、一礼する。

「続いて、副会長……」

秀才美男子が例のごとく進み出る。

柿坂郁也。カキザカイウヤ並びに俺、二ノ宮柘榴。ニノミヤザクロ

同時に、頭を下げる。

「最後に、会長……」

柘榴は面倒臭そうな表情を一瞬したが、彼の根は真面目なので最後まで言う。

「佐枇杷聖、以上です。」

聖は一礼することなく、満足そうに踏ん返り返った。
まばらに拍手が起こる。

「また、今から呼ばれる者は登壇しろ。遠藤蜜柑、梨里長閑。リンリノドカ……
長閑あ、蜜柑も連れて来い」

放心状態の蜜柑を見兼ねて、柘榴が気を利かせてくれた。

後ろの席から長閑が心底楽しそうにやってきた。

「ほらほら、みい」

「長閑……」

柘榴と同じ色素の抜けた長くてふわふわの髪。ピアス、だらしない着方の制服。けれど、極上の美少女が微笑みかける。

「いやはや、爆睡してたら面白そうな事になってるな。行くぞ、みい」

・・・見てくれだけは天使そのものだ。

蜜柑は渋々、壇上へと進み出る。

長閑がいれば悪くはならないはずだ。柘榴はすごぶる長閑に甘いから。

壇上では、柘榴が郁也にマイクを渡していた。

「柿坂郁乃、前へ」
カキザカイクノ

低音ボイスが何とも凜々しい。
続いて、透き通る様な刹那の声。

「同じく、三原柚」
ミハラユズ

蜜柑達の後に席を立つ人物が二人。

一人は、腰まで伸びた黒髪、ノンフレームの眼鏡、郁也を少し幼くさせた理知的な女の子だ。
見るからに妹だろう。

郁乃は眉一つ動かさずに登壇する。

もう一人は、中学生のように可愛らしい顔立ちの小柄な子。明るい金髪、海のような碧眼。海外の子だろうか。

制服を見てから、男の子なんだと気付いた。

そっこうしている内に八人の人間が壇上に立った。

柘榴が確認し、マイクを聖につきつける。

「ほら、残りはお前がやれよ」

聖は、にっと無邪気に笑うと宣言した。

「この四人をナイフメンバー候補とする。また、正式に決まり次第追って表明する。以上！」

平穏に送るはずだった高校生活が壊れていくのを、蜜柑はその目でしっかりと見た。

ミカン、ビワ、ザクロ、ナシ、カキ、モモ、ユズ。

八種類のフルーツが集結したのだった。

・ようこそ籠の中へ・

春休み中のこと・・・

長閑との話したことを思い出す。

『みい、柘榴が双樹の生徒会をやらないかと言ってるのだ』

『へー、すごいね。長閑やるの?』

『ああ、いささか面倒だが、柘榴という時間が増えるからな。それに今年は面白い加入条件があるそうだ』

『加入条件・・・?』

『なんでも、名前に果物を含んだ者が必須らしいぞ。どうだ?みいも立候補してみては』

『あたしはいいよ。向かないもん』

・・・・向く、向かないに関わらず入れられそうになるとは思わなかった。

新しいクラスの自分の席で蜜柑はボーツとしていた。

入学式を終えてからまだ、二時間ほどしか経っていない。

にもかかわらず、動く気が起こらない。

今日は午前中で下校のため、ほとんどの生徒は帰り支度をして、早々に帰っていく。

教室では、簡単な自己紹介やプリントの配布がされたが、終始、周りの視線が突き刺さった。

幸いにも長閑が同じクラスだったので、少しは安心出来たが、かなり居心地が悪かった。

「帰れそうか？」

支度の終わった長閑が傍に寄ってくる。

「うん・・・」

蜜柑は鞆を持って立ち上がる。

二人並んで廊下を出ると、待っていたのか、今来たところなのか、そこには柘榴がいた。

「よう。元気してたか？」

片手を上げ、笑いかけてくる。

蜜柑は何となく身構えた。

「みい、あんま警戒すんなよ。傷つくだろ」

「柘榴が汚い真似なぞ、するからだ」

長閑が唇を尖らせて、蜜柑の心の声を代弁する。

「長閑もノツてたくせに」

ぼそりと柘榴が言ったが、キツと長閑が睨むので、あらぬ方向を向いて口笛を吹いた。

「何のようだ、柘榴。詫びる気はないのだろう」

「連れないな、長閑まで」

柘榴は気にする風もなく肩を竦めた。

「分かったよ。午後暇か？」

蜜柑は長閑と目を合わせ首を傾げる。
暇かと言われれば、暇ではない。

「新居まだ片付けてないんだけど・・・」

躊躇いがちに言つと、柘榴は頭を掻いた。
おもいつきり、困り顔だ。

「ちよつとも駄目か？」

「う・・・ん、ちょこつとだけならいいけど」

「よし、長閑は暇だよな」

「暇人の扱いをするでない。まあ・・・暇だが。何かあるのか？」

その問いに柘榴は曖昧に笑う。

「ま、来りゃわかるさ」

それだけ言つとさつさと歩き出してしまった。
ついて来いと無言で訴えていた。

ここに居るわけにもいかず、二人はそれに倣って歩き出した。

一階の廊下を通っていると、突然思い出したように柘榴が方向転換した。

「悪い、悪い。購買寄ってくれ」

職員室の突き当たりを曲がると購買部の看板が見えた。

普通教室と同じほどのスペースは、がらがらで、人はちらほらいるだけだ。

柘榴はカウンターへ行き、ほどなく大量のパンの袋を抱えて戻ってきた。

「おまたせ、んじゃ、行くぞ」

（だから、何処に？）

聞きたいけど、柘榴からは有無を言わさないオーラが漂っている。

蜜柑は為す術なく、大人しく着いていくしかなかった。

三人は渡り廊下を横切り、校舎とは別に創られたプレハブ小屋に着いた。

真っ白な壁だが、所々がくすんでいる。相当、古いのかもしれないけれど、教室が二つ分くらいありそうな程の立派な小屋だ。

スライド式の窓の様なドアには、習字で書かれた、

『ナイフ本部』……の看板があった。

反射的に足が回れ右をしかけるが、柘榴の手がしっかりと蜜柑の肩を捕らえた。

「……………帰ってよろしいですか？」

「だ・め・だ」

そんな理不尽な。

がつくり肩を落とすが、長閑が微笑みかけてくる。

「心配するな。みいは私が守るぞ」

問題はそこじゃないが、根本的に諦めているので、もう何も言えない。

蜜柑は知らない間に、籠の中へ放り込まれていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8240b/>

果物語

2010年10月8日23時05分発行